アセスメント（児童生徒理解）の視点

一般的にアセスメント（assessment）は、「**児童生徒理解**」と訳されます。児童生徒に関して情報を集めることにより、「わかる」「理解を深める」ことですが、それは、いろいろな方法を駆使して、より積極的に「**わかろうとしていく**」意味合いがあるものと言えましょう。

▲▽　▲▽

Ⅰ　アセスメントの意味

アセスメント（児童生徒理解）は、児童生徒にどのような指導・援助をするのか（しないのか）を決定するために必要な**情報を収集・共有・判断・検証するプロセス**と言えます。

このように考えますと、アセスメントは、様々な情報を共有し合いながら、「今はこういう状況かもしれない」「このかかわり方が有効かもしれない」と仮説を立て、実際の対応によってその仮説を検証、修正していく営みとしてとらえることができます。

Ⅱ　情報の収集（状況把握）

アセスメントのためには、大きく分けて３つの分野の情報を集めます。

① 「その児童生徒個人」の情報

② 「その児童生徒を取り巻く他者や環境」の情報

③ 「その児童生徒と他者や環境とのかかわり」の情報

次に、それぞれのポイントです。

①「その児童生徒個人」の情報について

□　学習面、進路面、生活面において、いいところや苦しんでいるところは？
□　どのような状況の時、どのように感じ、考え、行動したか？（具体的に）
□　得意なことや興味があること、優れている点、ウリは？（「資源」、強い点）

②「その児童生徒を取り巻く環境」の情報について

◇　家族構成や家族の特徴は？
◇　これまでの学校生活での特徴的なエピソードは？
◇　これまでに同じような経験は？そのときの乗り越え方や有効だった方法は？（「資源」）

③「その児童生徒と他者や環境とのかかわり方」の情報について

☆　問題行動が起こったり、継続したりする場面状況は？
☆　誰が、どのようにその児童生徒をサポートしたり、力になれる？
☆　これまでのかかわりの中で、効果的だったことや役に立ちそうなことは？

Ⅲ　情報の共有（状況理解）

個々の教師によって収集された情報は、チーム会議で突き合わせ、多面的に検討し、総合的に理解することが不可欠です。情報は、伝えあってこそ価値が生まれるものなのです。

また、複数の教師が、児童生徒について情報を共有していこうとする雰囲気やまなざしだけで、その児童生徒に対する援助的な効果が生じるとも言われています。

Ⅳ　情報の判断（対応方針の決定）

共有された情報を基に、次のことをチームで判断していきます。

◎　誰が、どのようなときに、どのように「苦戦」するのか？
◎　誰が、どのような援助ニーズをもっているのか（弱い点、こうしたい点）？
◎　どのような指導・援助方針や目標をもつか？

Ⅴ　情報の検証（方針や対応の検討・修正）

対応方針に基づいて実行策を決定し、さらにその検討や修正をしていく際のポイントです。

①　誰が、誰に、いつまでに、何をするか（しないか）を決定し、実行する。
②　次回チーム会議の場で、うまくいった点、改善が必要な点、新たな方策が必要な点を話し合い、①の形で次の対応を実行する。

▲▽　▲▽

【参考文献】・石隈利紀著『学校心理学』　誠信書房
・学校心理士資格認定機構監修『講座学校心理士－理論と実践』第２巻　北大路書房
・日本学校心理学会編『学校心理学ハンドブック』　教育出版